

共通教育「情報処理（演習）」のアンケート集計結果について

理工学部電子情報システム工学科 成 田 明 子

slnari@si.hirosaki-u.ac.jp

1 はじめに

本文は、1997年度の共通教育「情報処理（演習）」の受講者を対象に、共通教育情報処理分科会によって実施されたアンケート調査の集計結果のまとめである。

2 背景

このアンケートが実施された昨年度は、共通教育の3年目にあたる。情報処理分科会でもスタートからそれまでの間に、授業の内容、実施体制、実施環境などについてはさまざまな議論が行われてきた。共通教育「情報処理（演習）」の実施体制において、学生に直接関わる部分で特徴的なのは次のような事柄である。

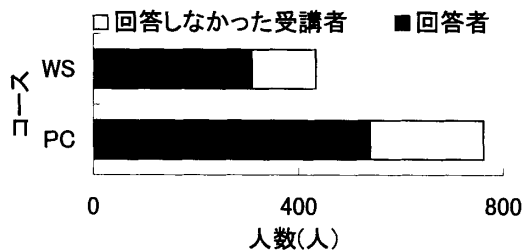
- ① 全学必修であること
- ② パソコン（以下 PC と略）コースとワークステーション（以下 WS と略）コースという異なる2種類のクラスが設けられていること
- ③ 学生がどの授業を受講するかは所属の学部、学科によってあらかじめ決められていること
- ④ ティーチングアシスタント（以下 TA と略）による演習補助が取り入れられていること

これらに関連して生じた問題のうち最大のものは、WS コースの対象学部・学科の多くが PC コースへの変更を希望したことである。WS コースの対象学部は理学部、農学部、医学部、つまりいわゆる理系学部であり、授業の内容はコマンドの入力やプログラミングを中心としたものだった。それに対してコース変更を希望する理由は、授業の内容が難しすぎる、あるいは上の学年に進級したときに WS に直接触れる機会はほとんどない、というものに尽くされていた。しかし、その要望すべてに応じるのに十分な台数の PC は用意されていない。そこでこの問題に対しては、WS コースの授業内容を PC コースのものに近づける、具体的にはソフトウェアの利用方法を中心としたものに切り替える、ということで対応を図った。この問題よりも少し後になって生じたのが、勤務態度の好ましくない TA がいるという授業担当者の指摘、受講者からの苦情である。そこで情報処理分科会では、受講者側からの授業の感触や TA 制度の現状を把握するために、アンケート調査を実施した。実施期間は前後期の授業の最終週を含む7月11日～7月23日と1月26日～2月12日である。実施にあたっては、授業時間に授業担当教官がアンケート用紙を配布し、回答用紙はその時間中に回収するかまたは回答者が総合情報処理センター事務室前の回収箱に入れる、という方法が取られた。

3 アンケート調査の内容および集計結果について

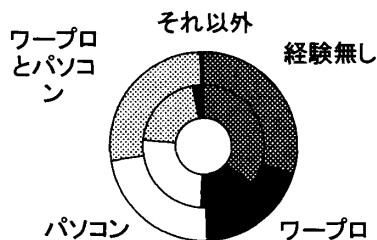
以下に、設問とともに集計結果を示す。

1. あなたが受講しているクラスはどこですか？
- (1) コース
 a. パソコン b. ワークステーション
- (2) 曜日・時限
 a. 月曜日 1・2時限 b. 月曜日 3・4時限
 c. 火曜日 1・2時限 d. 火曜日 3・4時限
 e. 木曜日 1・2時限 f. 木曜日 3・4時限
 g. 金曜日 1・2時限 h. 金曜日 3・4時限



PC コース、WS コースともに受講者の71%の回答を得ることができた。なお、受講者数はシラバスに記載されている数字によっている。

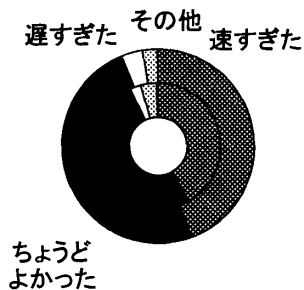
2. 大学入学以前にパソコンなどを使ったことがありますか？（複数選択可）
- a. 使ったことはない
 b. ワープロを使ったことがある
 c. パソコンを使ったことがある
 d. ワークステーションを使ったことがある
 e. その他 ()



外側: PC 内側: WS

PC、WS のコースの違い、すなわちいわゆる文系と理系の違いを問わず、回答者の約半数が大学入学以前にパソコンを使った経験を持っている。

3. あなたにとって授業のペースはどうでしたか？
- a. 速すぎた
 b. ちょうどよかった
 c. 遅すぎた
 d. ワークステーションを使ったことがある
 e. その他 ()

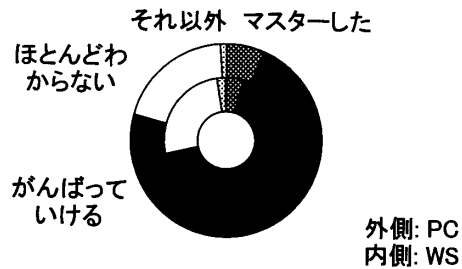


外側: PC 内側: WS

PC、WS の両コースともに、授業のペースを速すぎたと感じる回答者は4割強、ちょうどよかったと感じる回答者は5割程度であった。回答の「その他」では、「内容によって速いと感じたり遅いと感じたりした」というものが多かった。

4. この授業で扱った事柄はどれくらい身についたと思いますか？たとえば、「質問は電子メールでしなければならない」「表計算ソフトを使わなければならない宿題が出される」といった授業をこれから先受けたらどうなるか、ということを想像してみてください。

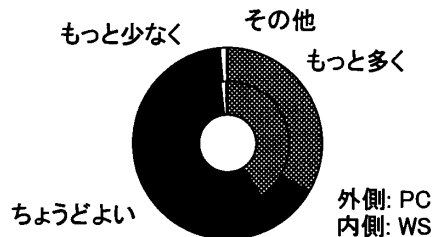
- a. しっかりマスターできた
- b. わからないところもあるが、自分なりにがんばっていけると思う
- c. ほとんどよくわからないのでやり直したい
- d. その他 ()



両コースとも回答者の 3/4 程度は、授業が終わっても自分なりにやっていける程度かそれ以上の自信を持っている。ほとんどわからないという回答者は 1/5~1/4 程度を占めるが、そのうち 2/3 以上は授業のペースが速すぎたと感じており、また約半数には大学入学以前にパソコン、ワープロ等の使用経験がない。

5. ティーチング・アシスタント (以下 TA と略) は何人くらいが適当だと思いますか？

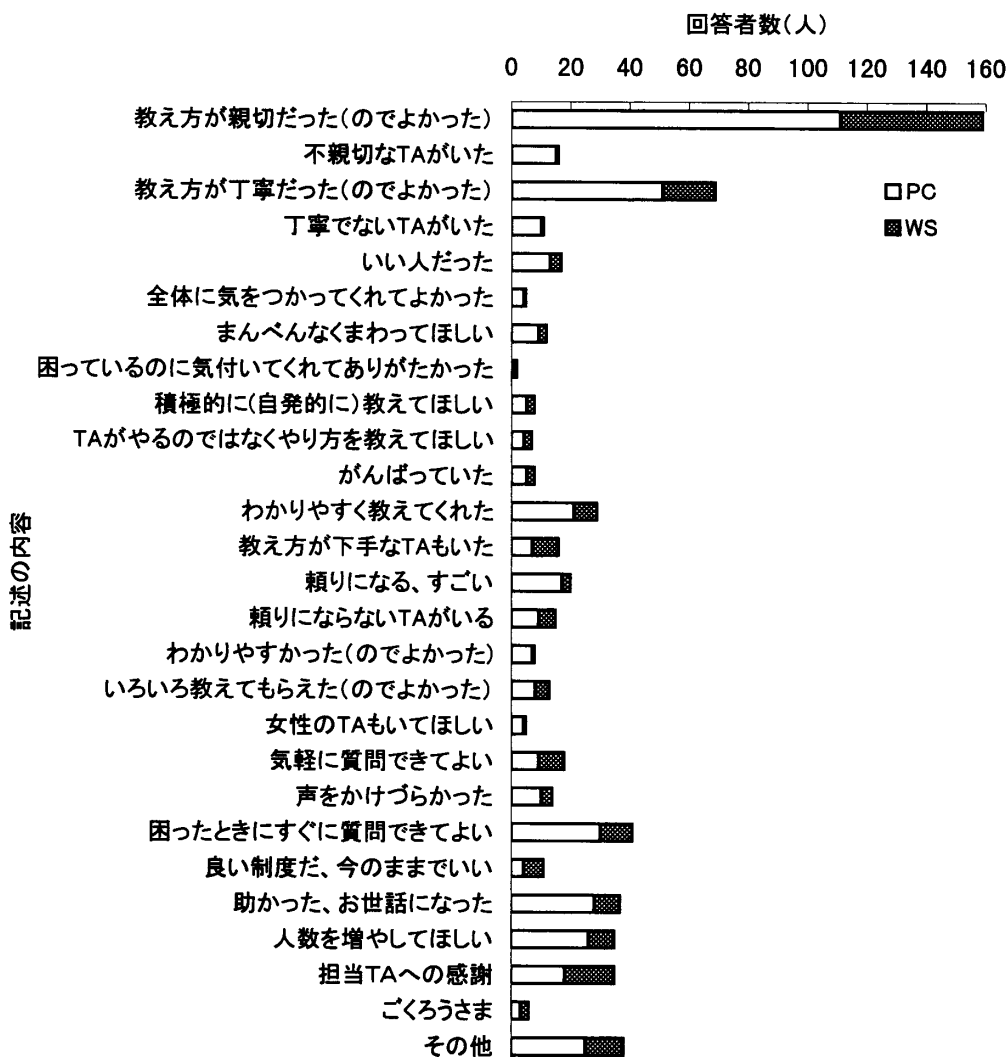
- a. 今より多い方が良い (具体的に 人)
- b. 今くらいでちょうどよい
- c. もっと少なくてもよい (具体的に 人)
- d. その他 ()



現在配置されている TA は、受講生50人あたりの平均で2.9人である。このアンケートの結果をもとに学生が希望している TA 数を算出すると、受講生50人あたりにして PC コースでは3.9人、WS コースでは4.6人となった。

6. TA に関連したことについての意見や感想を自由に書いて下さい。

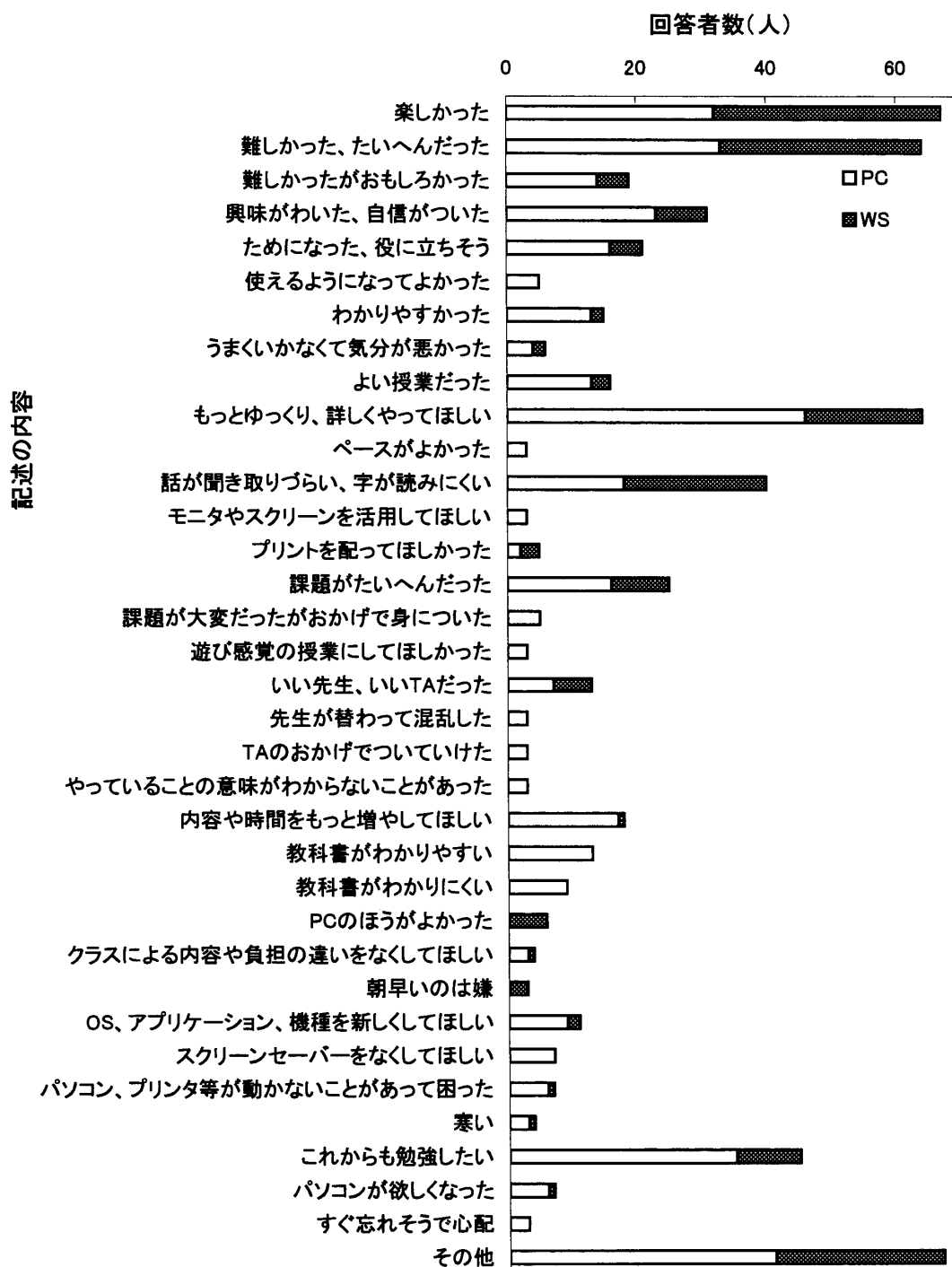
この問いに対する回答は自由記述形式なので、内容の近い回答を適当にまとめてグラフ化した。回答を要約してしまうと伝わりにくいのが残念であるが、TA のおかげでいかに助かったかを綿々と綴ってあるといったような熱烈的な支持がたいへん多い。しかしながら「私語がうるさかった」、「ガムをかまないでほしい」、「授業中に隣でゲームをしていた」、「相手によって態度が違う」、「質問するとマウスを取り上げてしまって質問者に操作させてくれない」といった批判も少数とはいえ見られた。これに対しては、半期の授業が始まる前に行われている TA 向けのガイダンスで注意を促すという対応をとっている。

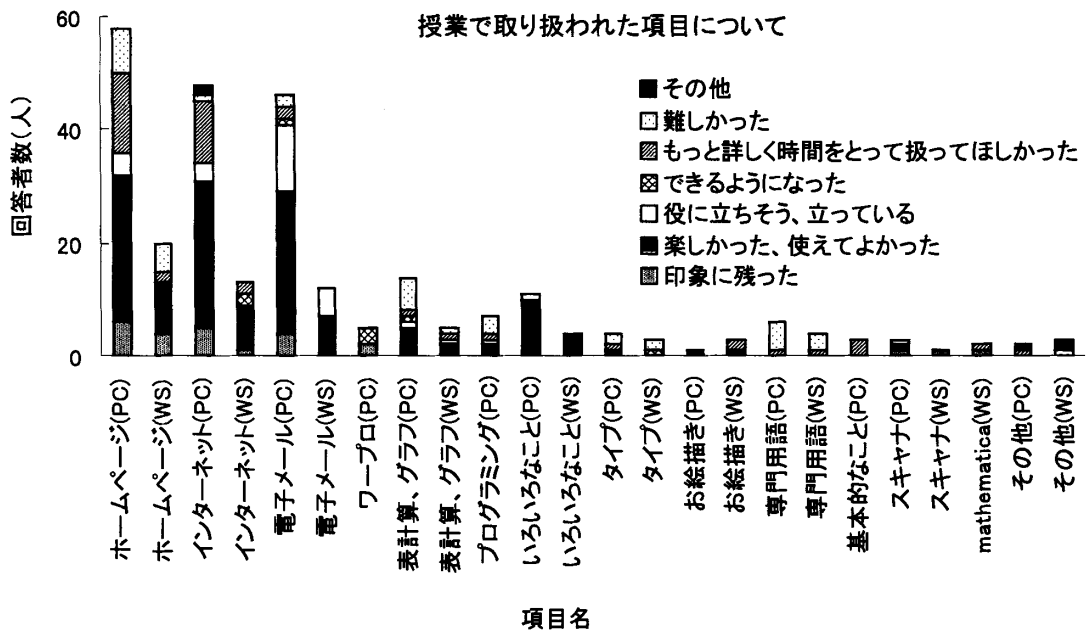


7. 授業で印象に残ったこと、授業の内容に対する意見や感想等を自由に書いて下さい。

この問いに対する回答も自由記述形式であるため、個別の授業に関するものと学習事項について述べているものに分けて要約し、グラフ化した。「楽しかった」「難しかった」「もっとゆっくりやってほしい」というものが数としては多いが、難易度や授業のペースについては、前述の選択式回答の集計結果を見るほうが妥当である。「その他」に分類した回答は、個人的な出来事に対する反省や感想が6割程度、総合情報処理センターの設備や利用規則についての意見が1/6程度、残りが授業の進め方や実施体制についての感想や評価であった。授業に対する感想は授業担当者によるところが大きいので、クラス別の集計結果は担当者に渡され、個別の対応が行われることになっている。授業で取り扱われた項目については、「ホームページ」「インターネット」「電子メール」といったインターネット関連のものに対する記述が圧倒的に多い。楽しかった、難しかった、といった感想のほかに、もっと時間をとってほしかったという希望が多いのも目立つ。

自分の受けた授業や学習環境について





4 まとめ

「情報処理(演習)」の受講者の多くは、「楽々こなせる」とはいかないまでも「そこそこやれる」と感じているようだ。このことについて、PCコースとWSコースのコース間での違いは小さく、現時点ではコースによる難易度の違いの問題はほぼ解消されているといってもよいのではないだろうか。また、TAの存在は受講者にとって大きいようで、TAもTAを採用する側も責任は重い。TAに採用された大学院生には、やりがいを感じながら自覚を持って授業に臨んでほしいものである。なお、クラス別の集計結果には互いにかかなりの違いが見られるため、全体の結果が任意のあるクラスにそのままあてはまるわけではないことを付け加えておく。また、受講者全体の3割弱については回答が得られていないことも考慮するべきであろう。

総合情報処理センターは来年早々に機器更新を控えている。それによって、OSや機器を新しいものにしてほしい、あるいはPCコースの授業を受けたい、受けさせたいといった受講者やWSコース対象学部、学科の希望は自ずと実現されることになる。したがって情報処理分科会としての当面の目標は、新しいシステムを利用した授業へのスムーズな移行であるといえる。一方、ある意味で当然のことといえるが、「授業のペースが速い」、「ほとんどわからなかった」という回答者には、大学入学前にパソコンもワープロも使ったことがない人の割合が高い。逆に、「ペースが遅い」、「マスターできた」という回答者のほとんどには、大学入学前にパソコンやワークステーションの使用経験がある。大学以前の教育課程への情報処理教育の導入、あるいは一般家庭へのパソコンの普及といった要素を考慮すると、受講生のスタートラインが前進してゆくこと、また多様な経験をもった学生が入学して来るであろうことに対して、どのように対応するかも将来の課題となるだろう。